見よ！幻想的渡瀬体制を！

学長・協議会団交を責任追求・自己批判の場とせよ！

全市大の学生院生教職員諸君！

安らぎの感覚はつねに厳しく自己に問い続けられなければならない。そして、

その実体は常にあばかれ続けられなければならない！

現在の市大の状況は今だもって国家権力の管理大学であるという事、そして我々は当局の授業再開＝斗争収拾画策に結局は屈従する事によって、そのような市大の状況に、国家権力の管理大学に無感覚であったし、現在もそうであるという事、それらの実体を、我々は渡瀬体制＝大学当局が、自己に全く権利を有さない学生・院生の人間存在としての叫びに対する、その基本的な要求に対する余りにも無感覚な対応の中に、いやという程みせつけられてきた。しかし、そのような従来の人間的感覚の下に此状態を支えてきたのは、我々自身であった事を再認識しなければならない。我々の授業再開に対する態度が、単なる当局の強権的策動に対する反撥以上のものでしかなく、そして今や、なすすべはないといった形で授業に臨んでいるならば、そしてそのような意識性をもって学長団交に臨もうとしているならば、それは粉砕の対象以外のなにものでもないだろう。それは、既に授業をうけているという事において、自己が学生存在であるということ、即ち、物質的には他の人々が、身近かには両親が、総体としては労働者階級として存在し、その抑圧と搾取の上に自らの存在を維持し、そして学長団交に参加することを述べることにより、すでに自己のそのような存在を隠ぺいするべく、虚構のイデオロギー構造の上に、自己の正当化の論理を求めているのだということを認識しなければならない。そして、そのような虚構を更に上塗りしようとしているのが、今回の渡瀬の団交にのぞむ態度なのだ。ここで、再度、従来の全学団交における欺瞞性を暴露しなければならない。それは、市大斗争始って以来、一貫して話し合いによる操作的解決を叫びながら、の内にみられるごとく団交要求を一方的にふみにじり、それも全共斗が参加するとはいうだけで。運動主体の、そして市大斗争を主体的に担ってきた全共斗を抜きにした話し合いはなぜ考えられようか。そして渡瀬は10・4⊗ド入をもってそれに答えたのである。そして過去、⊗を背景にした強権的な授業再開策動＝斗争圧殺を行い、その一環として今回の団交も位置付けられているのだ。我々の学園斗争を再構築せんがためにも、今回の団交を明確に、渡瀬追及＝自己批判の場と化し、そして自己の存立基盤を再度とらえなおすことが我々に課せられた任務である。

全市大の学友諸君！院生諸君！自らの存在を普遍的存在たらしめよ。本日の団交に結集し、徹底的に当局を追求せよ！

幻想的渡瀬体制の実体を見よ！

本日は、1時から学長協議会大衆団交へ

結集せしよう！

化　[illegible]

数人実